

合同句集

待兼山

第三集

待兼山俳句会



合同句集

待兼山

第三集

序

井上 浩一郎

合同句集待兼山第三集の上梓を心からお喜びいたします。

昭和五十四年の浪高俳句教室を始まりとする浪高俳句会という句会があり、旧制浪速高等学校に学びの籍を置いた人達をもつて組織されてきました。山田不染・林直入・吉年虹二という選者のお名前があります。

この浪高俳句会を受けつぐものとして、大阪大学関係者を主体とする、現在の待兼山俳句会が平成十三年に発足したのです。

待兼山俳句会に長く席を置かせていただき、勉強させていただいたことは、私にとってまことに楽しく、幸せなことであります。今、この会が沢山の立派な俳人を擁するしつかりした句会となっていることは、ご同慶に堪えません。

会の運営に当たっていただいている世話人の方々のご苦勞に感謝し、この会のますますのご発展を祈念し、合同句集第三集の上梓を祝して、ささやかな序言といたします。

平成二十七年二月吉日

待兼山第三集

序

井上浩一郎

川崎香月

草壁 昂

林 直入

齋藤義雄

長山あや

佐伯箕川

井上浩一郎

佐伯道子

上田元彦

阪本ゆたか

碓井遊子

須賀洋一

大塚磨央

鈴木輝子

片岡京子

鈴木兵十郎

瀬戸幹三

三宅洛艸

田中嵐耕

向井邦夫

鶴岡言成

森 茉衣

寺岡 翠

森井英雄

中村和江

山田安廣

西村浩風

山戸暁子

根来真知子

終りに

東中 乱

長山あや

東野太美子

あとがき

平井瑛三

山戸暁子

題字揮毫

故河野ふくを

爛酒

故林直入

街浄めたる雪汚す雪となる

獅子舞の親子気合の合うてをり

枯芒枯れの極意を知つてをり

大仙陵大寒林でありしかな

橋よりの景山脈の遠は雪

豆撒の豆が背中に入りしまま

竿に干す若布筵に屑若布

かまくらの子等みな二重瞼なる

よき日射しよき風白子干日和

結局は歌碑の字読めず山笑ふ

池遅日乏しき釣果飽きもせず

春光の溢れて眠き会議室

紅うつぎとは山出しの紅の色

袋掛しても侵せし虫の知恵

若き日の吾等の像や風薫る

半日で浴衣縫ひ下されし母

盆の僧一氣にお茶を干されたる
迎火に四五本摺りし燐寸の香
老母の涙もろさよ魂送り
去来墓探しあてたり鉦叩
英国の林檎小さきを憐みぬ
人声も槽音も蘆に消えてゆく
足ごしらへ程には茸採れざりし
蓮根掘る鈴鹿風に苛まれ
数奇屋風とは隙間風ほしいまま
聞きてもう忘れ鮫鱧の道具の名
木兎の聞き耳立てている如し
湯豆腐の湯気爛酒の小さき湯気
楽しみは年用意してあとの酒
病む人の足より梅雨に入りけり

平成二十六年六月五日 直入宅句会にて

- 1 林 隆夫 2一九二六年生（二〇一四年七月逝去）
- 4 旧制浪高 東京大学農芸化学科卒 元吉原製油 元食品コンサルタント
- 5 ホトトギス・山茶花同人 待兼山俳句会選者 句歴六十六年

1	本名
2	生年
3	居住地
4	略歴
5	句歴

五月雨

長山あや

五月雨や大河となりて海へゆく
五月雨に人恋ふ雨の情あり
気配なく攻め来る黴の恐ろしき
柿の花落ちて無念の土の音
ででむしやわが家てふ荷の軽からず
死について語る夫婦やみみず鳴く
ほととぎす草淋しく暗く己れ抱く
露の世に君と呼ばれて五十年
己が死期諾ふ夫と月仰ぐ
残されし二人の月日林檎剥く
栗むいてむいて話の尽きざりし
届きたる新酒や一献また一献
一掬の新酒外科医の黙を解く
俳句てふ麦蒔きつづけ来し仲間
今は亡き師よみそなはせ冬うらら
待兼会五百余回や冬うらら

石路の黄や句心育て来し月日
大根を抱きて急ぐ家路かな
北国の夜は北風の楽に酔ひ
北風といふ澄み切つた風が好き
真夜ひとり北風と言葉交しをり
師走てふ言葉に心走り出す
咳ひとつこぼす癖あり父帰宅
氣の向かぬパーティへ行く寒さかな
ぐんぐんと寒さ積み上げ音もなし
熱爛に夜の外科医の責を解く
木菟鳴けば淋しだまればなほ淋し
毛皮などいらぬ生きてる猫が欲し
北国に育ち寒さが身を律す
熱爛といふ身の内に燃ゆるもの

1 長山あや 2 一九三六年生 3 兵庫県神戸市在住

4 大阪大学文学部卒

5 昭和五十八年より稲畑汀子先生に師事、ホトトギス同人、待兼山俳句会選者、句集「芒とや」、翻訳稲畑汀子著「虚子百句」100 Works of KYOSHI

風鈴

井上浩一郎

風鈴の昔の音をひとつ買ふ
ときに向き変へて川見るとんぼかな
剣先に分れて水の秋二つ
虫籠を置けばひとつの暮しまた
息白く短き声に糶り落す
下萌に話しかけたく腰下ろす
時雨傘大路北から開きゆく
牧の風ひきしまり来て馬肥ゆる
この天を力の限り鳥渡る
一本の梅のあるじでありにけり
素朴なる魚籛のたくらみ恐ろしき
底紅をゆかしく咲かせ家古れる
裸火にはかなきものを草の市
菊人形どこか遠くを見てをりぬ
下宿とは酢莖の桶の横の部屋
いつの間にひとりとなりし枯野かな

大淀の果てに師走の入日かな
残雪や荒磯へむく蟹の小屋
かく小さき門より春の風と入る
手花火やはなやぎてまたしみじみと
城垣の川面へ放つ鷹ひとつ
ふくらんで日に当たりをり初雀
紅梅や年寄つてからよく笑ふ
梅咲いて梅に従ふころかな
はるかなる闇に動ける山火かな
庭ぢゆうに雨の光らす木の芽かな
釣葱揺れ直入の句碑小さき
くつさめや読むもあらずに黴の本
放下してまた放下して爽やかに
振り返り見れば紅葉のなほも散る

1 井上浩一郎 2 一九三一年生 3 大阪府箕面市在住

4 旧制浪高修了、京都大学法学部卒 元大阪府水道企業管理者

5 大阪倶楽部俳句部にて稲畑汀子先生の指導を受け、俳句の道に入る。浪高先輩の林直入氏、吉年虹二氏の導きを受ける。ホトトギス同人、伝統俳句協会会員、待兼山俳句会選者

生かされて

上田元彦

大楠に我が身委ねし初詣
かまぐらの小さき灯に人の寄る
下萌や褪せし地蔵の涎掛け
身を屈め橋桁潜り春惜しむ
百千鳥大手門への下り道
新緑の杜に顔出す金のしろ
完走の猛者倒れこむ春の雪
効きさうな青き茅の輪の熊野宮
睡蓮の浮島五つ色違ひ
日焼けせし二軍選手の頼もしき
訛声は親譲りかも烏の子
風薫る金環蝕の小半時
夏空の金環蝕へ鬨の声
知らぬ間に鴨の陣なしるたりけり
声押さえ鴟低く飛ぶ森の中
怖ず怖ずと上戸に紛れ新酒酌む

負け知らぬ六甲嵐新酒酌む
菊人形源氏平家の隔て無く
土俵守る両横綱の神無月
酢茎樽比叡嵐に晒されて
北風を味方にガンバ優勝す
河豚鍋の軽き痺れとその旨み
宇宙まで雲一つなき小春かな
焼き魚の味引き出せる大根かな
猪鍋を囲み明日の釣り談義

タイ僧と大仏拝む冬日和
散紅葉丘に寛ぐ人と鹿
やつとこさ癒えし女房と冬至粥
寒月の孤独慰む星きらら
浮き寝鳥しばし流されては戻り

1 上田元彦 2 一九三三年生 3 大阪府吹田市在住

4 大阪大学薬学部一九五六年卒 元塩野義製薬研究所員

5 句歴十数年、山茶花瞳集選者である中西以佐夫先生の指導を受ける。

山茶花同人（二〇一五年）

たびごころ

碓井遊子

風ぎわたる島への航路紅椿
法螺貝にここだ花散る吉野かな
飛鳥川埋めんばかりに花筏
木屋町をそぞろ歩きの春の宵
額田王しのぶ野遊靄かかる
縄文人かく暮らせしか蛤焼く
逝きし師を偲ぶ座敷や桜鯛
一献の伊賀の夕べや若葉影
加賀ことば響く湯殿や青葉窓
長雨や釣り人たちの鮎談義
みちのくの分水界や鮎を焼く
みささぎに柿の花咲く飛鳥かな
更衣 天香具山すそ長し
三山を見晴るかす丘夏立ちぬ
家持の孤愁の丘やほととぎす
海の日や人麻呂の詠む羈旅八首

稜線の長き山ある帰省かな
布引の飛沫をよぎる黒揚羽
絹の道イスタンブールの凌霄花
街路樹の赤き林檎や伊那の町
秋天に高さありけり槍穂高
干柿を吊すホームに降り立ちぬ
三山の囲む廃都や虫時雨
蕉翁の旅の結び地花桔梗
銀杏散る南御堂の辞世の句
鷹一羽椰子の実一つ伊良湖岬
輪舞して気流に乗るや鷹柱
油屋の蔵の旅籠や雪月夜
煌めける夜汽車駆くるや雪の原
居酒屋の守り神なる嫁が君

1 碓井 崧 2 一九三六年生 3 名古屋市在住

4 大阪大学大学院文学研究科博士課程社会学専攻中退、阪大文学部助手を経て、国立三二大学・私立三二大学の社会学教授歴任

5 無所属。句会は金沢市の「風」句会、名古屋市の「萬緑あゆち」句会へ参加。主として俳句総合誌に投句。第二十回高梁市文学選奨俳句部門受賞

断章

大塚磨央

たまゆらに散りて帰らぬ女郎花

秋さむや買物かごに食料品

バス待ちに寒さこたへる日暮れ時

教え子と忘年新年打ち合はせ

喪の知らせ我より若き人の増え

落葉かき屍の始末思はせる

カクテルを捧ぐる秋の女まろうど

子が孫をつれて年末里帰り

温泉に一人で浸かる年の暮

句を詠みてしみじみおぼゆ老いの坂

金剛の峰もさむかる秋深し

雪便り豊中はまだ縁がなし

チルチルもミチルも往かん暮れのみち

ぬくたまる嗟峨野の秋の土瓶蒸し

われ一人落柿舎を訪ふ秋のくれ

藤村や左千夫に溺れる年の暮

1 大塚頼三 2 一九二九年生 3 大阪府豊中市在住

4 大阪大学理学部物理学科卒、大阪市大助手、阪大理学部助教授、阪大教養部教授を歴任、阪大教養部長で退官、福井工業大学教授、河崎医療技術専門学校、阪大理学部非常勤講師歴任。

5 阪大教養部長時代に大峯あきら氏に俳句の洗礼を受ける

残る雪

片岡京子

探鳥の湖北の里に残る雪
人込みの鹿に躓くお山焼
春の街松の匂ふ桶屋かな
たんぽぽを吹き出す土の匂ひかな
一斉に大樹の芽吹く虚空かな
今年また八十八夜に摘みし茶を
雨しとど初音の森の小道かな
俳句てふ楽しみありて夏来る
更衣生成り木綿の肌ざはり
隣席のクリームパフェ子供の日
北国の日差し詰まりしさくらんぼ
八重咲きの芍薬崩れさうな夜
青芝の日差し啄ばむ雀かな
夕涼み上手に死ぬる話して
夕風に海の音聞く月見草

白桃のするりと剥けし朝の卓
透き通る日差しに揺れて秋の蝶
葛切や水琴窟の音流れ
手花火を終へて匂ひの風の中
かなかなや蕪村遺愛の硯箱
底紅忌堂鳥川の満ち満ちて
押入れに日向の匂ふ冬支度
初時雨かすかな木木の匂ひして
茶の花のこぼるる垣根東山
寒梅の一輪のみの白さかな
枯葉踏む音に埋もれてしまひけり
霜晴の日差し透ける御堂筋
遺されし時計の刻む十二月
悴みて独りの家に戻りけり
屈託を湯船に沈め除夜の鐘

1 片岡京子 2 一九三二年生 3 大阪府大阪市在住

4 旧制浪高、大阪大学工学部応用化学卒 故片岡和雄の家族

5 句歴十年、二〇〇四年文化教室「俳句入門講座」受講、二〇〇九年待兼山
俳句会入会、二〇一二年よりホトトギス投句

竹の春

川崎香月

風花の照り翳りして舞ひにけり

藁苞に小宇宙あり寒牡丹

紅梅の紅引き落つる雨雫

生命永願ひて耐ゆる二日灸

老ハイカーペアルックに山笑ふ

白雲の遊行みてゐる遅日かな

さはさはと音の乾いて麦は黄に

ブータンは幸の国長閑なり

連山の影を映して代田かな

短か夜や雨の匂ひに明けにける

零るともなく零れをり柿の花

涼しさの葉ずれの音を運ぶ風

耳にあて貝殻にきく夏の詩

御宸翰やも陵の落し文

自づから風の道あり萩繚乱

風のみち大きくうねり竹の春

名月や復興なりし姫路城
高からぬ大和三山豊の秋
硬き音鈍き音して木の実落つ
曲屋に慈しまれし馬肥ゆる
初紅葉して一景の調へり
風のみち磯の香の径秋高し
時雨つつ時雨つつ山色を替へ
帰り咲く一枝の淋し空碧く
三本は重し大根貫ひけり
作務僧の布施の大根高く干し
やをら立ち伸びする猫に小春濃し
客去りて厨を仕舞ふ夜の寒し
木兎の栖家の大樹伐られける
北風に飛ばされ渡る交差点

1 川崎須美子 2 一九二七年生 3 大阪府泉南市在住

4 旧制浪高卒 川崎文雄の家族、華道御門流

5 浪高俳句会で山田不染・林直入両師の指導を受く。のち「未央」吉年虹二、「壺」山内年日子両師に師事す

月

草壁 昴

たゆたうてセーヌに浮かぶ夏の月
暮れなずむ沖に帆ひとつ夏の月
航跡の泡消え止まず夏の月
地の果てふ岬へ延びる月の道
夕月や砂丘に残る日の温み
朝まだき半月白き旅の空
国後の島かけ遠き星月夜
灯を消せば障子に灯る月明かり
水すまし天地の境に舞ひ狂ふ
八寸の鮎八寸に凜として
不揃ひの鮎を詫びをり山の宿
雲の蓋被さり来たり梅雨の入り
声明の肅々と消え雪の下
座禅くむ人気なき寺初時雨
蒼空に洗はれしごと枯木立
漆黒の天蓋燻す山火かな

紅梅や紅満ちて弾けたる
一輪の紅梅空を広く見せ
春立つや書棚に古き旅日記
野に遊び草の香まとひ帰り来し
野遊びや語らふ二人動かざる
若楓青き葉影を重ね合ひ
五月雨や廊下に響く松葉杖
芭蕉布や糸繰る人の指涼し
月見草寄り添って聞く波の音
会釈して去りゆく人や月見草
触れ合ひし指の記憶や白芙蓉
初秋や傘にやさしき雨の音
手花火の後に広がる闇ほのか
汝が魂のまとふごとくに雪舞へり

念願が叶ふ

齋藤義雄

念願のかなひて雪の永平寺
寒垢離や修験者の山径険し
宴闌けてやをら獅子舞出番かな
早春や外に出たがるスニーカー
小流れの人気の茶店猫柳
桜餅日々好日の余生かな
鳥帰る群れにおくれし番ひかな
春雨に濡れるもよしと先斗町
乗り継いで時差を正して旅日永
句の道にいそしむ余生青き踏む
若芝のきつき芝めに難パット
茶柱を愛でる八十八夜かな
青麦に被災地の笑み戻るらむ
春の夜や目覚むればまた宿の温泉へ
万緑の継ぎ目継ぎ目のマヤ遺跡
来客に一泡放つ水中花

紫陽花を切りて諾ふ雨意の空
空蟬の風葬を待つ軽さかな
旅先の死海の塩に西瓜かな
自づから分担決まる盆用意
継ぎはぎの歳時記いとし夜半の秋
病葉の散り行く先に石仏
ひめゆりの塔にさまよふ秋の蝶
顔を出す蟋蟀親し厨口
爽やかや趣味に輝く妻とゐて
そぞろ寒身辺整理続く日々
時雨るるや珈琲店かタクシーか
木兎の鳴き声に急く足止まる
マネキンの毛皮に妻の後戻り
みちのくに翁偲びつ枯野行く

1 齋藤義雄 2 一九二五年生 3 大阪府箕面市在住

4 旧制浪速高校、京都大学医学部薬学科 元大日本製薬、
元マルホ、元京都薬科大学非常勤講師

5 元青門同人、句歴二十六年

屠蘇祝ふ

故 佐伯箕川

茅屋に日ざし溢れて屠蘇祝ふ
三島すぎて二月の富士を確と見し
胡沙荒るるモスクの国の人やさし
実朝忌車窓に見放さく小島かな
姉は白妹は紅の梅なりき
さざれ石てふ椿なり葉も細か
ムバラクもカダファイもゆらぐ下萌えて
永き日と言うも我が持つ時短か
春眠や七人の敵皆忘れ
春の夜の華やぎにゐる姥かな
出代りのしをらしげにも宣誓す
はやぶさや苦節七年風薫る
亭からむしをつむぎて強こほき生地を織る
雲海の雲の遊びの限りなく
真夏日も笑まひたまへる伎芸天
適塾のきざはし険し百日紅

秋篠の苔の毛氈蜥蜴走る
タクラマカン砂漠の西瓜山と積み
背を割りて空蟬のやうに服を脱ぐ
蛇穴に入りてまた出る日和かな
豹紋蝶金コスモスに恋をして
新米の粥をすすりて癒ゆを待つ
素逝忌や父英訳の「砲車」読む
この辺りわが父祖の地ぞ霧深し
枯葉舞ふシャンゼリゼーも大原野も
帰り待つと母の言葉や咳交へ
河内屋のおかみ神楽のおかめ顔
極月や父の蔵書の所を得
毛布一枚破れし軍靴復員す
熱爛や饒舌の人黙る人

1 佐伯秀穂 2 一九二六年生（二〇一五年一月逝去）

3 大阪府箕面市在住 4 旧制浪高、東京大学法学部卒

筍

佐伯道子

きしきしと雪踏むわらべ心かな
朝な朝な庭すみに待つ露の臺
春川の音と思ひて橋渡る
何の芽か庭隅の土動かして
ゆるやかに井堰を越ゆる春の水
春眠を自分にゆるす齡かな
逝く春や震災の惨そのままに
青麦の芒ちくちくと下校道
家苞のこの筍の重きこと
挨拶もなく筍の置かれし
豊作の筍がまた来るといふ
豌豆がつんでくれろと揺れて居り
若葉して弊衣破帽の夢のあと
石に彫る和歌美しき蟬丸忌
傘さしておしゃべり長し五月雨
老鶯をキャンパスに聞く日曜日

節電の夏越す思案あれこれと
日焼けせる顔のいひわけより始む
お不動の忿怒を仰ぎみて涼し
きりぎりす首なき地藏おはします
四棟の社宅のあとの猫じゃらし
せはしげに庭ひとめぐり秋の蝶
兵卒の丈そろふ墓草の花
年経りし陸軍墓地や鱗雲
白菊の白とこしへの祈りとも
散歩道ふいに布団を叩く音
氏子らが寄りうぶすなの蓮根掘り
冬天に流星を待つ人の声
枯野ゆくおもちゃのやうな電車かな
今度こそ又日記買ふ八十路かな

平成二十三年

阪本ゆたか

初曆俳書整理の日を探し
列島の隅隅までも初日影
青空の落とせしものか竜の玉
大試験やることはやりあと天に
被災せで転入の子も入学す
更衣娘らしくて見直せり
仏の灯ひそかに燃えて黴の宿

月下美人咲く勢ひの香を天に
整然と加賀百万石の大青田
夏秋の蟬の合奏 男山

消えはじめ妙法の火の美しく
まんまるが何故か悲しき盆の月
別人となり退院するサングラス
花芒風の波間に光りけり
虫の闇分つ一灯ありにけり
人多き道頓堀の秋暑し

線香の一本高く露けしや
秋の蝶高くは飛ばず風にのり
水軍の隠れ洞窟秋の潮
一枚の葉書来てゐる月の土間
蜜柑山太陽に向き海に向き
狭庭にも寄つて見やうと来し小鳥
大原野吹き抜く風に秋おしむ
天帝のくれし小春日何とせん
京に来て時雨に合はず帰るとは
きてほしと思ふときには来ぬ時雨
嗟峨時雨四条通りもまたしぐれ
何もかも忘れてしまふ日向ぼこ
鯰敷に賭く男意地天を突く
鯰糶の威勢に明くる能登の浜

1 阪本 穰 2 一九二五年生 3 兵庫県川西市在住

4 旧制浪高、東京大学法学部卒、元警察庁（福井県警本部長、福島県警本部長、警察庁首席監査官）、総合警備保障代表取締役専務5 大阪ロータリー俳句会・大阪倶楽部俳句会・待兼山俳句会・関西草樹会にて作句。ホトトギス同人

瑞枝

須賀洋一

すくめたる肩ほぐれゆく梅見かな
水温み心開きて友を待つ
気がつけば春の装ひ交差点
寂しさをいかに鎮めん春時雨
春雨を音なく落とす鎖樋
ふと目覚め続きをみたき春の夢
花冷えや独り居の部屋音もなく
老いてまたさくら花咲く時迎へ
春めきて大和三山色づきて
春雨を突いてハルカス天に伸び
門出する若人の背に春の雪
鐘の音に亀も小声で鳴きにけり
起重機の降りゆく先に卯浪立ち
娘が炊きし筍飯の妻の味
瑞枝より零るる雨滴百日紅
雨雲の行方見定め代搔す

流れゆく雲の行く手に朴の花
蹠より涼しさ貫ふ仏間かな
西方に独り佇む盆の道
雷雲に高压塔の仁王立ち
初時雨ふと口ずさむ謡ひとつ
初秋の風に押されてひとり旅
爽やかや嵐の後の杉木立
初霜や猫の足跡うつすらと
わけもなく寂しさこみあげ冬めけり

ヴィヴァルディ第四楽章今朝の冬
なすことも無き独り居の年用意
遠慮なく朝酒戴く三が日
降る雪に目を遊ばせて独り酒
通り過ぎ後より匂ふ冬の梅

1 須賀洋一 2 一九三五年生 3 兵庫県西宮市在住

4 大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。ドイツ文学専攻。関西学院大学
名誉教授。『シユトルム名作集』(全5巻、三元社)で「キルヒ父子」、「大学時代」
「豪農の館」を翻訳。他にシラー、シユトルム、ヘッベルの作品等を論究

5 二〇一二年二月、山戸暁子姉に導かれて待兼山俳句会に入会、故林直入、
長山あや、井上浩一郎の各選者の御指導を得て今日に至る

柿若葉

鈴木輝子

ゆくりなく寒紅もらふ誕生日
雪折の音響く村吾子の住む
獅子舞に泣く子逃げる子手を打つ子
セーター編む言葉とどかぬ日であれば
空色のランドセル買ふ浅き春
頼られて頼りて二人二日灸
どの色もちびたクレヨン卒園す
野遊に行かむ検診無事ならば
春の夜賢治の童話読んでやる
怪我の子のひとり窓辺に子供の日
少年の遠き瞳や夏来る
柿若葉照り誰も来ぬ日曜日
少年のボートは岬まはりゆく
みどり児も母も眠りて涼しき夜
墓四つ恋しき順に供華を置く
少年の怒りかくさずトマト食ぶ

送り火や仏を知らぬ子の二人
僻地なる吾子よ達者か月今宵
温め酒この人と来し五十年
酢橘買ふ酸つぱい顔になりながら
檸檬かじる少年濁世に染まらずに
黙のよし二人で落葉たく午後は
百色のパステルひろげ庭小春
小春日や順に抱かせてもらふ稚
諍へばおろし大根辛きかな

小春日や千羽の鶴を折りあぐる
ただ一度父と熱爛酌みしこと
あつ気なく終る湯豆腐ひとりの夜
ばら色のひざかけ毛布娘の呉るる
たしかなる明日のあるべし冬木の芽

1 鈴木輝子 2 一九四二年生 3 大阪府柏原市在住

4 大阪大学文学部教育学科教育心理学専攻卒業

5 二〇〇二年待兼山俳句会入会、関西草樹会・有恒俳句会・ホトトギス・未央

野に遊ぶ

鈴木兵十郎

打ち合ひし独楽の火花や薄明かり
背を伸し寒紅をさし出て行きぬ
柔かき色見せ硬き露の臺
砂洗ふぬめり懐かし新若布
ダム放水かいくぐり行く岩燕
樵の木の動き出したり春の山
蜷動く動かずと見せまた動く
芽柳の糸を束ねて色となり
月斗句碑小さき桜散りかかる
野に遊ぶ今日のひと日を妻と居て
無き風に真直ぐに落つ桐の花
絵筆とる人を撫でゆく若葉風
掌に細螺残して潮満ちぬ
樵林ひと揺らしして風薫る
色紙の葉玉一つ残されし
額の花疎水の脇の地藏尊

翻へりては風を呼ぶ夏燕
涼しげに朱を残し立つ伎芸天
迎火に津波の松を焚きし浜
大草原端より端へ大銀河
大草原走る夢見せ走馬灯
白寿なる母の笑顔や望の月
静けさのしみ入る緑竹の春
秋の潮被災埠頭へひた寄する
雲海の底より朝の時報湧く
朴落葉踏みて無限の星思ふ
一杯の酒飴色の酢莖食む
茫々と平城宮趾の芒原
縦横に獣道あり大枯野
牧草もヒースも枯れて海光る

1 鈴木敏夫 2 一九四一年生 3 大阪府柏原市在住

4 大阪大学工学部造船学科卒、元大学教官、現大阪経済法科大学客員教授

5 職場の句会において五年間ほど蘇鉄主宰山本古瓢氏の指導を受ける。

二〇〇六年より待兼山俳句会に所属。関西草樹会・有恒俳句会にて作句、ホトトギスに投句

林の音

瀬戸幹三

木耳や林は音に満ちてをり
釣堀のにほひして父帰りたる
若楓ばかりに風の吹くことよ
パトカーの大阪訛り梅雨の町
やはらかき音する夜の新樹かな
まひまひのもうまひ始む雨の後
線香花火手に藁しべの残りたる
道問へば日焼の顔の集まりぬ
太閤さんの濠に生れし蜻蛉かな
船長の分厚き手にて沖膾
まつ白な一本の道原爆忌
少年のプールに薄き肩入れる
幾度も叩かれてゐる西瓜かな
くしゃくしゃのハンカチ出して振り給ふ
秋の蚊を打ちて己の血の赤き
声変りしかけてゐる子草の花

かくかくと菊人形の回りをり
バス停を探してをれば威銃
ちちろ鳴くしばらく行かぬ家の裏
色町の昼餉静かに枇杷の花
湯冷めかと思ひし時はもう遅く
つまづきて泣顔となる寒さかな
笑ふとき金歯の見ゆる飾売
去年の湯の湯気立つてをり魔法瓶
獅子舞や老いたる方が前足に

山彦のきれいな谷や杉の花
石段に赤き実こぼる実朝忌
春眠の耳より覚めてきてをりぬ
水筒の蓋より湯気が花の冷
春驟雨豹の見てゐる遠くかな

1 瀬戸俊昭 2 一九五〇年生 3 兵庫県芦屋市在住

4 大阪大学基礎工学部情報工学科卒

5 二〇〇一年 (株)博報堂の社内俳句会「源八句会」に参加。

二〇〇六年 待兼山俳句会に投句を始め、現在に至る。雲同人・俳人協会会員

豊の秋

田中嵐耕

霜晴や風の子たちの遊び声
大皿にをどれる切身あらひ鯉
風渡る明るき田畑豊の秋
高原のはるけし牧に馬肥ゆる
香りたつ朝の厨の芹なずな
獅子舞の優しく噛みぬ抱く子に
鎮魂の海へ風花消えゆけり
銀色の雨をこぼせる猫柳
みどりごの春眠時にほほえみて
日よ風よ大地につんと麦青む
竹の春風の明るき嵯峨野みち
車椅子同士の散歩息白し
寒月に吐ける白煙桜島
山頂の残雪映ゆる落暉かな
日溜りは瑠璃色だまり犬ふぐり
渚行く二人の拾ふ桜貝

川風に色の揺れゐる秋桜
月光のあまねく抱く芒原
青首の大根の香もおろしけり
退院の人を迎へる月夜かな
航涼し明石大橋はるかなる
ででむしの歩みのごとし人の世も
東山けむりて京のさみだるる
天上の花の舞ふかに春の雪
春立つや看取りの朝に見る笑顔
鬪病の人寒紅を濃く引きぬ
八十路こえ生きるよろこび初手水
重ね著て約束果たす一日かな
もてなしはまづ鱒酒をすすめけり
河豚提灯ともれば店に満つ笑顔

1 田中豊造 2 一九三〇年生 3 兵庫県尼崎市在住

4 旧制浪高、大阪大学法経学部、元阪急不動産専務取締役

5 一九五四〜六〇 雲母、一九九七 待兼山俳句会、その後関西草樹会、有恒俳句会、老人ホームの「俳句しま専科」世話人、

ホトトギスに投句

貪瞋痴

鶴岡言成

風花や空に生まれて空に消ゆ
熊笹の隈白々と寒の庭
亀の井に含みて甘し寒の水
幣束の少し汚れし一月尽
年の豆撒いて戸締め固くする
太極拳つちふる街の公園に
残雪や日に日に汚れゆくさだめ
清らなる瀬見の小川や春立ちぬ
香をきけばやはり紫花すみれ
如月の花待つ心もどかしく
秀頼と淀自刃の地桐の花
宴果つ筍飯を褒め合ひて
代田搔く平和な暮らし願ひつつ
黴匂ふ和綴じの本の並ぶ棚
一周忌君懐かしむ枇杷の味
苔まとふ地蔵の裾にかたつむり

丈六に余る如来や堂涼し
剥落の涼しさ纏ふ伎芸天
棚経にあらためて知る貪瞋痴
あきつ舞ふ梅檀木橋渡りけり
禁色をたわわに掲げ式部の実
秋の水集め水琴窟唄ふ
海よ山よポートタワーよ秋の空
露天湯に味はふ空気峡紅葉
時雨初む宿場に辿る昔かな
宇宙まで広がる我が世秋の空
道標に熊注意とは冷まじや
灯笼の後ろを灯す石路の花
大根煮る香りに籠る妻の味
寄生木の所在あらはに枯木立

1 鶴岡 誠 2 一九二九年生 3 大阪府富田林市在住

4 旧制浪速高等学校、大阪大学工学部応用化学科卒

5 句歴 十七年 関西草樹会・有恒俳句会 その他、俳号は本名由来

草萌ゆ

寺岡 翠

万両や唇赤き弁財天

強く引く寒紅病魔に負けじとぞ

焼山や燃え行く命萌ゆ命

早や三年紅梅の丘一人立つ

かまくらの灯それぞれ子等の城

忌を修しいざ生きめやも草萌ゆる

霾るは厭放射能もつと厭

苗札や後は日まかせ雨まかせ

鎮魂の海に淡雪惜しげなく

樹冠よりひらりと余花の便り来る

メサイヤ果て新樹の闇に紛れ行く

田搔き終え里の灯恋しき人馬かな

言ふことを聞かぬボートや初デート

ギリシヤ神戯る噴水人群れる

雲海を押し上げアポロンの馬車出づる

夏の月孤高に逝きし師を想ふ

中元や今日もまたまた長電話
賑やかに霊を送りて闇深し
蓼の花余生平々凡々と
縁側に名月入れて独り酌む
天高く浮ぶ均整五重塔
秋天や朱塗の門に龍踊る
蛇腹てふ裏修験道木の実降る
石庭にさざ波起せ鴉一声
今年酒来し方思ひ人想ひ
献立が決まりいそいそ大根引く
齟齬有りて親子でありて酢莖食む
画架立てて小春日の瀬戸一望に
ランドセル揺らし駈け行く白き息
咳きこめば真に母に似て来たる

1 寺岡ミドリ 2 一九四〇年生 3 大阪府堺市在住

4 大阪大学薬学部卒

5 二〇〇三年 鈴木輝子さんに誘われ、待兼山俳句会で句作を始める。
二〇〇七年より関西草樹会会員

花は葉に

中村和江

耕しの天に延び行く赤き土
春休み大人へ羽化の鼻の髭
ポケットに卵駆けだす新入生
通学路近道抜け道諸葛菜
そつと入りそつと出ていく春の風
小海線ゆるゆる登る花の人
花は葉にナウマン象の住みし湖
初夏や一生分を泣く赤子
大空に志あり水馬
麦秋や捨てられに行く猫の声
宇宙より還り来し星麦の秋
知らぬこと増しゆくほどに苔の花
梅雨長し妻の繰り言長々し
猫も木に登りて居たる残暑かな
夜の秋茅舎の句集に父の丸
父と子の空の重なる流れ星

樹海より高き海ゆく赤とんぼ
束ぬれば日に愁ひある曼珠沙華
サフランの風に優しき愛のせて
三日月に腰かけて居し幼き日
枯草を抱けば太古の香り充つ
幸せの卵を四つ聖菓焼く
子は遠しウルムチからの初荷受く
スカイツリー大東京の独楽の芯
色々は下戸の涙か金平糖

春北風に放流の稚魚固まりて
梅ふふむ明日のときめき喜びも
人生は八回表苗木植う
比良八荒縁の薄き姑の里
そこここに母のほほえみすみれ草

1 中村和江 2 1944年生 3 埼玉県深谷市在住

4 大阪大学文学部英文科卒

5 結婚を機に東京へ。夫の転勤で埼玉に移り、地元のオープンカレッジで佐藤貴白草先生に俳句の基本を学ぶ。英語俳句を勧められて国際俳句交流協会会員に。数年前山戸暁子さんの呼びかけにより「待兼山俳句会」に入会、作句の軸になっている。地元では島田妙子先生主宰の「天」句会に所属

日本の四季

西村浩風

やつてみてやらせて褒めて独楽廻し
風花に日輪月のごときかな
若布干すここ奥能登の空重く
なんとなく華やぐ鳥語春立てり
紅梅や人も心を開かねば
基肥のほこほことして苗木植う
木屋町は片側道や水温む
ふとんふくらませて東山笑ふ
春の夜や一つの影となる二人
川風に柳の靡く酒の街
四代の履物並ぶ子供の日
葉桜となりて懐深き蔭
夏落葉苔やはらかく受け止めて
棲みつきし垣のでで虫動かざる
築かけて峡の十戸の深眠り
夕顔やネクター外し一と日終ふ

恥ぢらひの始まる齡月見草
せせらぎの瀬音も馳走川床料理
送火に妻は言ひたきこと言はず
西瓜切る積もる話はあとにして
閉ぢぎはの彩を尽くして酔芙蓉
親しさの木戸より訪ひて秋桜
正調も破調もありて虫時雨
栗を剥く妻は真顔となつてゐし
木の実落つ時に二拍子三拍子
大綿の夕日に紛れ見失ふ
初時雨今日より京の幾時雨
掛大根日時計で足る杣暮し
抽選器がらがら師走かきまはす
耳よりな噂飛び交ふ焚火の輪

1 西村 浩 2 一九三〇年生 3 大阪府高石市在住

4 大阪大学法経学部法学科卒 元三和銀行、定年退職後鴻池合名会社に勤務

5 地元結社の俳句春秋社に抛りホトトギス等に投句。関西草樹会・大阪倶楽部俳句部会員、句歴二十六年。俳号は浩然の氣を体し本名に風を付したものである

雪なつかし

根来真知子

大地いま下萌ゆるもの押し出しぬ
春の山光吸ひ込みはね返し
春の夢うつつはさらに儂くて
露の臺闌けゆく時を惜しみけり
野におけと思へどやはり摘む堇
虫出でよ人も出でよと春の雷
春の雪受けし手に消ゆ天の文字
包みるし時こぼしつつ牡丹咲く
永き日や過去が現在いまなる母とゐて
来し方を思ふ春の夜闇重し
縁日を抜けし浴衣の着崩れて
グラントへ麦茶の薬缶両の手に
軽き妬み山梔子の香のうとましく
雨意重し匂ひ動かぬ栗の花
衣替背丈いささか縮みしか
かまどうま足らざるものは足らぬまま

木菟の声闇のゆるぎと聞きしかな
芒原吾を招くごと拒むごと
遠ざかる君沈みゆく芒原
萩刈れば抱へるし風こぼれ落つ
秋高し欲張らざれば身の軽し
人の世の無常を抜けて月昇る
芭蕉葉の風と睦みつつ争ひつ
寂しさは言はず紅葉の色を愛で
蹲踞に灯笼に添ひ石露の花
毛皮着て女なにやら獣めく
大綿の空の隙間をこぼれ舞ふ
雪降り止む太郎次郎よ目覚めねば
雪なつかし父の歩幅の広かりき
吸ひし音みな放ちつつ雪溶くる

1 根来真知子 2 一九四一年生 3 京都市在住

4 大阪大学文学部卒

5 二〇〇二年五月より待兼山俳句会所属、二〇〇五年十月より関西草樹会所属

花の塵

東中 乱

夢現問はず遭ひたし雪女
大鵬の霊大寒の天翔ける
吟行の利休の町に風冴ゆる
胎動の力を秘めて冬木立
おぼろげに行く末見せて春の立つ
盆梅の四百年の紅さかな
草摘みてしばし万葉人となり
苗札の使命果たして文字の消え
人麻呂の歌碑へ下萌踏みしめて
酒蔵の杉玉揺らす春の風
指先の綺麗な人や桜貝
箒目を正しくなぞる花の塵
葉桜のまた立ち返る静心
子燕の身を寄せ合ひて天こ盛
青芝に子と転がりし頃のこと
跳ねし音耳朶に残してあらひ食ふ

池巡る間に未草目覚めけり
両の手に掬ぶ名水涼しけり
衣被かすかに残す土の味
父母愛でし旧居の月の庭も消え
いつの間にかコスモス同居街路樹と
メリケンといふ名の歴史秋の海
エジソンの選りし八幡の竹の春
論文を書き終へ爽やかな一日
秋高し一日終はるを惜しみけり

菊日和妻とデイトの観覧車
廃れたる酒蔵覆ふ蔦紅葉
穏やかに黄葉るを待つ大銀杏
山うたたた荒涼飾る檀の実
破れ蓮生き尽くしたる潔さ

1 東中稜代 2 一九四〇年生 3 京都市在住

4 大阪大学文学部英文科卒 アルバート大学大学院修了 龍谷大学名誉教授

5 句歴 約二五年。ホトトギス派の同人粟津松彩子に師事。俳号の「乱」は

父が漢学者から貰った名前、家族の誰も使わなかったので俳号に用いた。

「乱」には「治める」の原義もあり、「おさむ」と訓読みさせてもよい。つまりこの俳号には「乱世を治める」という含みがある。

夏桔梗

東野太美子

知り尽くすこの家の迷路嫁が君
青空に寒紅梅の饒舌な
時の使者との貌持ちて露の臺
麦踏や足裏に伝ふ息づかひ
下萌や大地は助走はじめたり
菜園のアフロのやうな水菜かな
庭手入れ困りゐてなほ苗木植う
遠州の浜を眩しく白子干す
名苑の遅日庭師のまだ去なず
袋掛右に左に島のバス
わが宿の窓辺眠らぬ朴の花
梅雨ひと日銀器のくもり磨きけり
笹の香を纏ひて鮎のはこばるる
屋上と天との鬨ぎ合ふ炎暑
昨夜はもう昔となりぬ月見草
ふと触れし夏瘦の肩わびしかり

案外に几帳面な子墓洗ふ
卓上に師を悼む白夏桔梗
よべの雨虫の声まで潤ひて
芒壺に風の姿を活けにけり
月天心山湖の眠り深くあり
帰り花人の記憶を巻き戻す
紀ノ国を見まはるやうに鷹舞うて
母偲ぶ能楽堂や石路の花
来し方を語りて寡婦の小春かな
冬めく野セピアの色を重ねゆく
人住まぬ部屋に寒さの住みはじむ
よろこびも決意も白き息の中
稜線の透け枯木立なりしかな
行年やまだ肩の荷を下ろせず

1 東野太美子 2 一九三九年生 3 大阪府東大阪市在住

4 旧制浪高、大阪大学医学部卒 故東野一彌の家族

5 ロイヤル俳壇・下萌句会にて稲畑汀子先生に師事。ホトトギス同人

蜷の道

平井瑛三

寒梅や仕込み終へたる酒の蔵
妻編みしセーター少し派手なれど
薄緑かさねかさねて春の雨
曲水を草書でたどる蜷の道
永き日を言葉忘れし妻とゐて
見はるかす通天閣や桜越し
蛤の聴きしは海の挽歌かな
時折は亀水に入る薄暑かな
黴匂ふまだ捨て切れぬ専門書
青芝にニイチエ語りし昔かな
足裏に嵯峨野の声や竹落葉
甲冑のワンピースなり蝉の殻
子らのみな湯上り匂ふ地藏盆
初秋の勉強部屋に灯のともる
悲しみは忘るるがよし走馬灯
受験子に付き合ふ母の夜なべかな

風紋の砂丘に高し今日の月
茶の花の畝を三筋の茶室かな
啄木鳥に応ふる黙や虚子の塔
窓飾る旧居留地の葉鶏頭
居留地の面影追うて秋の街
妻ねむる虫を聴きつつ独り酒
食へるかと杣にききつつ茸とる
行けど行けど加賀どこまでも豊の秋
遺志つぎて子の守る牧や馬肥ゆる
酢莖あり京のぶぶ漬お替りす
わが道をゆく螻蛄の日和かな
頬にまで霜の降り来る夜道かな
熱爛にふと口ずさむ寮歌かな
冬枯の嵯峨野にひそと去来塚

1 平井瑛三 2 一九二八年生 3 兵庫県川西市在住

4 旧制四高、大阪大学医学部薬学科卒、元シオノギ製薬

5 J A S S俳句会・関西草樹会・有恒俳句会

かまくら

三宅洛艸

湿原の靴跡に生る薄氷

焼山のすこし露はにけもの道

大人ぶるかまくらの子のご挨拶

陽炎の野に消ゆ一輛電車かな

いつもより早き御下がり桜餅

焼蛤申し合はせしやうに開き

袋掛終はり満艦飾の果樹

アルプスの峰まだ白き袋掛

葉桜となりて鎮もる忠魂碑

妻逝きて俣にならざる更衣

黴の香の抜けざる俣に形見分け

忙しさを誇示するやうにみずすまし

山も野も待ちて久しき梅雨入りかな

裸ぐせ娘に諭されてゐる父御

植木畑その一面に植うる茄子

初秋や朝の比叡の近く見え

送り火の果ててしばしの皆の黙
宵闇や誘ふやうに屋台の灯
湯気あがるままに供へし衣被
折に触れ人生論説く夜学の師
満ち足りし眼となりて夜なべ終ふ
冷まじや噴気こもごも地獄谷
夕鴉に切り上げられし立ち話
枝といふ枝みな大根懸けし庭
大原女の商ひの声初時雨

落ちさうで落ちぬ櫟の枯葉鳴る
うどん食ふ寒さふつ飛ぶ音立てて
S L の遠き汽笛や大枯野
力なき咳に看取りの憂ひ濃し
電話とる妻は師走の声となり

1 三宅敏夫 2 一九二一年生 3 京都府宇治市在住

4 旧制浪高、京都大学工学部卒、元栗村金属工業

5 大学の頃句作開始。その後五十年余中断。退任後吉永淡草氏の指導で再開。待兼山俳句会で林直入、吉年虹二、長山あや氏らに師事し平成七年関西草樹会入会。山茶花同人。ホトトギスに投句。洛南に住むことと淡草氏の草を頂き併号とす

柿の花

向井邦夫

初手水東の空に震へたる
嫁が君大黒柱また齧る
寒の月旅籠なき道歩みけり
寒紅の微妙に違ふ伯母と叔母
立春や励ましの風畦道に
焼山に小さき生命の動きをり
水温み何か蠢く川の底
雨に濡れ馬酔木の花のしつとりと
今少し歩いてみやう春の夜
春の夜や即かず離れず酌み交はす
徒然なり雲一つだに無き日永
子の手脚すらりと伸びて夏に入る
代搔きの順巡り来し川下田
ふるさとの友との閑話柿の花
五月雨の止んで村里みづみづし
月見草心の晴れぬ闇夜かな

夏の月短き生を淡淡と
お使ひの辿り着いたる土間涼し
両断に歓声あがる西瓜かな
花芙蓉短き夢を見尽くして
子等魅せし線香花火の火玉かな
夜なべする妻の聞きゐる子の寢息
帰るさは車窓の月を友とせし
鳴き終へし虫を迎ふる大地かな
あらばしり匂ひも味もちと淡き
大根引残されしものいと憐れ
綿虫や命繫げば死の軽し
重ね著をしてよく父母の出掛けたる
枝先にすでにしつかと冬芽あり
年用意祖母の仕切ぞ見事なる

1 向井邦夫 2 一九四〇年生 3 兵庫県西宮市在住

4 大阪大学文学部仏文学専攻卒業・同大学院修了、大阪教育大学名誉教授

5 句歴二年。待兼山俳句会にて故林直入氏・長山あや氏・井上浩一郎氏の指導を受ける

遊歩道

森 茉莉

夕立や雲間に覗くオレンジ色
鬼百合の花粉を付けて仔猫行く
女神湖や水面駆ける仕掛花火
夏空や月に遅れる宵の闇
萩の寺ともに訪ねし友去りて
心にも宵闇迫る憂き世かな
仰ぎ見てうつむき見ても紅葉かな
豊作をゆつたり言祝ぐキーツかな
早春や野性りんごの花記憶
転校の別れの駅の春時雨
名月を猫と語らひ魔女気分
丈高き紫苑に隠れ庭仕事
花びらの散るに見まがふ秋の蝶
春一番ヴァチカンからの退位宣言
始まりに向かつて旅立つ卒業式
テーブルの黄水仙越し語り合ふ

遊歩道歩調ゆるめる日永かな
山間の鄙びた寺の初桜
春の夜に浸る記憶の甘さかな
山と川みどり一色夏立ちぬ
颯爽と人も自然も更衣
煌煌と円形劇場に夏の月
黒日傘モネの知らない紫外線
よろこびにときめく心凌霄花
八月がひとときは愛しい秘密あり
大文字書齋の窓の正面に
地面から飛び立つ光初雀
春立ちて山の稜線ふくらみぬ
寒紅や微笑まずともあでやかに
紫陽花の葉蔭に揺れる猫の夢

1 森 道子 2 一九四〇年生 3 兵庫県神戸市在住

4 大阪大学文学部英文学専攻卒業、大阪大学大学院博士課程単位修得終了、
二〇一三年 大手前大学名誉教授

5 二〇一一年 待兼山俳句会に入会させていただきました。それまでは俳句
の創作とは無縁でしたが、「ハハキギ」に所属していた母の短歌に魅力を感じ
ていました。

虫集く

森井英雄

めざめたる夜半のひととき虫集く
亡き人をしのびて聴くや虫時雨
名も知らぬ秋草摘みし野辺はるか
頬撫づる風さはやかに散歩道
酔芙蓉はや散り落ちし夕べかな
安らぎの木蔭の風や夏来る
ひつそりといっしか散りし柿の花
あてもなき絵ごころの旅長閑なり
のどけしや生きる歓び弾くピアノ
月見草遠き日の恋しのびけり
やはらかな風に色のせ若楓
春の宵若き日の恋ふと胸に
無人駅降り立つ旅ののどけしや
スケッチの筆すすむ里水温む
濡れながらすぐに止むかと春の雪
きさらぎの月こうこうと天心に

静寂をやぶり里山鴉高音
スケッチの色さまざまに秋高し
由緒ある酒蔵にこそこの新酒
青空を舞台に大綿白き舞
煮えごろの大根うまし酒うまし
年忘れ人それぞれにもの思ふ
北風やつかの間の日の部屋の中
冬枯の見わたすかぎり鎮まるや
かたくなに客選びする河豚店主

老いてなほおしやれもしたし重ね著に
初明りこのひとときのしあはせを
京の雪夕日に映ゆる金閣寺
すこやかな息子家族の初電話
彼なりの手作り賀状来ずなりぬ

1 森井英雄 2 一九二七年生 3 兵庫県尼崎市在住

4 旧制浪高、京都大学経済学部卒、ニチメン取締役・常勤監査役、横浜国立
大学大学院教授等を歴任

5 一年五カ月前よりグッドタイムリビング尼崎駅前の「俳句しま専科」にて
田中嵐耕氏の指導を受ける

轍

山田安廣

星一つ掬ひ取りたり初手水
ながながと深き轍の凍ててあり
如月や日差し踊れる水の底
水取りの果てて御堂に火影揺る
芽吹くほど重くなりゆく柳かな
月も星も溶けゆく如し春の夜
水菜煮る平凡の日々有難き
友偲び異国の土に苗木植う
空気さへ緑に染めて若楓
蛍狩り箒のなかの青き火よ
椎の花重く匂うて夏来る
色もなく原子炉建屋梅雨に伏す
五月雨の軒の雫が時刻む
蝙蝠の鋭き声に闇落ち来る
淵深く一閃二閃鮎の腹
西瓜割る声のはじける浜辺かな

国分つ長き壁にも小菊咲く
見上げたる空の広さや茸狩
母逝きし鴟繁く啼くその朝に
一歩ごと虫の声止む野の小道
ほろほろと萩散る縁のひとり酒
秋高し白樺の白空の青
空冴えて初冠雪の富士近し
満天の星に眠るや枯木立
河豚提灯間抜け顔なる竿の先

包丁に裂かるる河豚の腹白し
決意して眉を上ぐれば冬の月
雪女神に手向けむ長き髪
寒月と独り対峙して過去想ふ
パソコンを閉ぢてともかく年暮るる

1 山田安廣 2 一九三八年生 3 兵庫県西宮市在住

4 大阪大学大学院薬学研究科修士課程修了、同年ロート製薬(株)入社、以後
ロート製薬(株)、メンソレータム(株)、(株)アンズコーポレーションに勤務

5 二〇〇七年寺岡翠さんに誘われ少しずつ句作を始める(年間二十句程)この間、寺岡翠さんを通じて長山あや氏の指導を受ける。二〇一三年一月より待兼山句会に参加(投句のみ)、二〇一三年二月より待兼山句会例会出席

花大根

山戸 暁子

雪折れや耐へに耐へきし音ならむ
夫引きし傍線のあり読み始む
老いてよき顔になられし冬帽子
立春や跳んでみやうかこの小川
残雪や家々訪うて小商ひ
春雨やおほかた眠る動物園
意思持ちて残れる鴨と思ひたし
野に遊ぶいつか独りの世界かな
苗札を立て終へ小糠雨となる
春眠の底より徐々に這ひ上がる
花大根つくづく我に取り得なし
水と土匂ひ立たせて代田搔
蕎麦つゆの少し辛目や梅雨に入る
父の日といふ難しきひと日かな
単衣着て眩しき街を漂へり
もう聞けぬ涼しき声の名乗りかな

ビル街を威嚇するごと雲の峰
蝉時雨くぐり十石舟のゆく
知らぬ子も混じりてゐたり地藏盆
秋天へ湯気立ちのぼる中華街
天高しコロツケを買ふ列につく
夜業の灯分け合ふ父子町工場
茸狩持ち来し籠の大きすぎ
爺の目にだけよく見える茸狩
新酒酌み心を開きすぎたるか
大綿のごと知らぬ間に消えたかり
すばすばと大根切つて気の晴るる
独り居の寂しき自由重ね著て
いつの間にかあたり暮れゐし焚火かな
晩年は独りで枯野ゆくごとし

1 山戸暁子 2 一九三六年生 3 大阪府堺市在住

4 大阪大学文学修士、元大学非常勤講師

5 一九九八年長山あやさんのお誘いを受け「円虹」に入会、二〇〇一年待兼山俳句会に入会、ホトトギスに投句。草樹会・有恒俳句会会員

終りに

長山あや

編集に携わって下さった方々のご好意に依りまして、三冊目の待兼山俳句会の句集が出来上がりましたが、大変なご苦勞をおかけすることになりました。おかげさまで月々心を寄せ合って研鑽して参りました結果を、ひとつの形として見せていただくことになりました。少々心もとない思いもありますが、毎月、着実に進めて参りました努力の成果として大切にしたいと思います。

そしてこれを新たな力として、またゆつくり一歩一歩、楽しい努力を重ねて参りたいと思います。
ありがとうございました。

平成二十七年二月

あとがき

待兼山俳句会は会員の歩んできた道も時代も異なっているのに、青春の一時期を同じ学び舎で過ごしたというだけのご縁で、何ともいえない安らぎを覚える句会です。

この句会は昭和五十四年四月、旧制浪速高等学校同窓会の浪高俳句教室として発足し、その後浪高俳句会に発展しました。平成十三年一月には大阪大学関係者及びその家族に会員を拡大し、「待兼山俳句会」と改称しました。戦後、旧制大阪高等学校と共に旧制浪速高等学校が大阪大学に併合されましたが、その際豊中市待兼山のキャンパスと校舎が法文学部として使用され、さらに豊中キャンパスに拡張された縁によるものです。

第一集には会の発足から第三一七回句会（平成十二年五月）までの句が収められました。これは旧制浪速高等学校創立七十五年祭を記念して出版されたものです。同校創立八十五年祭記念に出された第二集にはそれ以降第四六七回句会（平成二十一年九月）までの句が収められました。

この度の第三集は旧制浪速高等学校創立九十周年と、待兼山俳句会が平成二十六年十月に第五〇回を迎えたことを記念して企画されました。過去の記念出版と同様に、旧制浪速高等学校同窓会から補助金を賜りました。厚くお礼申し上げます。

この句集には現会員の内、三十名の自選句と故人二名の句を合わせて収めました。前回の合同句集以降の五年の間に前田草机さん、林直入さん、佐伯箕川さんがお亡くなりになりました。中でも林直入さんは本会発足以来の会員で、長年選者として会をリードして来られたので、会員一同深い悲しみに打ちひしがれました。第三集は故人となられた方々への追悼の意を籠めて編ませて頂きました。私たちはこの素晴らしい句会を継続してゆくために新しい会員の増えることを心より願っております。

出版に際して、ご発案頂きました田中嵐耕さん、貴重なご意見を賜りました鶴岡言成さん、世話人の方々、中でも寺岡翠さんにお世話になりましたことを深く感謝申し上げます。なお、編集・制作に格別のご協力を頂きましたデザイン球の石塚博和様に心からお礼申し上げます。

平成二十七年二月

世話人代表 山戸暁子

合同句集 待兼山 第三集

発行日 平成二十七年五月

発行人 待兼山俳句会

〒59318301

堺市西区上野芝町4-14-45

山戸暁子

制作 デザイン球